

宮古圏域の「著書・論考」をたずねて 第三部 組織の動向

仲宗根 将二

1. 宮古地区医師会 「沖縄県宮古島医療史」

宮古の医療史が2011年11月、(社)宮古地区医師会によって刊行された。多少とも関わったものとしてはいささか手前味噌になるが、宮古の医療史上特筆すべき快挙であろうと考えている。

1、己の身を削って

構想から20数年の歳月を経ているようだが、最後の1年間ほぼ毎週のように編集会議が開かれている。池村真会長をはじめ、数名の医師が1日の診療を終えて夜、医師会事務所に集まり、お茶と駄菓子だけで原稿の点検など、編集作業にあたっている。席上、ことあるごとに話題にのぼっていたのが、「先輩方の志の高さ」である。

宮古は現在、百名内外の医師がおられるようだが、大戦後のある時期まで10名内外、多いときでもせいぜい20名ほどであった。数少ない学識者として、日ごろの診療の傍ら、地域社会各界の求めるままに、医療以外のさまざまな分野で活躍しておられる。

余りの多忙さからであろうか、当時の医師の大方は60歳を待たずして、その生涯を閉じておられる。

「医者の不養生」という言葉があるようだが、現実是不養生などでないのは明白である。郡民の診療に従事しながら、その間に、求められるままに己の身を削ってさまざまな社会活動に従事していたのである。

こうした献身的な活動を知るに及んで、「医療史」編集に関わった医師たちをして、畏敬の念をこめて「先輩方の志の高さ」と、言わし

めたのであろう、と受け止めている。

2、幅広い活動領域

2012年、宮古島市が刊行した『みやこの歴史』には、古琉球(現代まで、医師ばかりでなくさまざまな分野で活躍した多くの人物が登場する。

宮古が遅れて近代を出発したせいでもあるだろう、これらの人びとも大方専門の領域に止どまらず、他のさまざまな分野に足跡を残している。例えば明治期から昭和初期に知られた立津春方は、宮古出身(平良・西里)で初めて東京高等師範学校(現筑波大学)を出た教育者だが、啓蒙家・宗教家・政治家として幅広い足跡である。晩年は、交通機関の未整備のところとあって、平良から毎月徒歩でハンセン病入園者の宮古南静園に通い、入園者に法話を説いている。

また、宮古出身(下地・洲鎌)で初めて長崎の医学専門学校(現長崎大学医学部)を出た盛島明長は、医師であるばかりでなく、宮古郡織物組合長として、宮古上布の品質向上、販路開拓などに尽力している。県会議員・同議長・国会議員にも選出され、宮古高校の前身である旧制の県立宮古中学校や高等女学校の創立にも大きく関与している。

3、民衆に支えられて

近代宮古は、このような優れた指導者・組織者を輩出させている。当然のことながら、志高く、優れた指導者の背後には圧倒的多数の名もない人びと、民衆がいることも見落としてはならないであろう。彼らに依拠しての指導者である。

昨秋、若者達が催した復帰40年記念シンポジウム「宮古のアイデンティティを求めて」を傍聴しながら、現在の宮古の基礎を築いた有名・無名の志高い先人の苦闘の足跡を回想していた。

2013年もたゆむことなく新たな歴史が紡ぎ出されていくことであろう。
(「宮古毎日新聞」二〇一三・一・一)

〈付記〉初出標題「宮古ペンクラブ設立10年『志高い』先人に導かれて」

2. 前里元「長幼有序」

池間島には「ムトウ」とよばれる組織がある。人びとの出自に由来するのであるか。マジヤ、アギマス、マイヌヤ、マイザトウの四つ。子はすべて出生後初めて迎える「ミヤークツツ」二日め(シナカヌヒー||中の日)の早朝、親の所属するムトウに届け出る(マスマイ)習わしがある。ミヤークツツは旧暦8〜9月の甲午の日から3日間開催されるが、男性は数え55歳になると、「ムトウヌウヤ」と称してそれぞれのムトウに参加し、豊穣を感謝して、生ある限りこの世での幸せを願う。夕方は水浜に四ムトウ総出で、クイチャーを踊って過ごす伝統行事である。

四ムトウのうちのマイザトウ(前里元)がこのほど、「元之屋」竣工30周年の節目を祝って、記念誌『長幼有序』を出版した。写真をふんだんに使ったA4判、163頁に及ぶみごとに記念誌である。

巻頭を飾る、佐久本茂美撮影、編集によるグラビアは圧巻である。1974年、94年、97年につづけて、2000年から2014年までの15年間で54頁各年2〜3頁、各頁5〜6点、320点余収めている。1974年のみ白黒で4点、水浜のクイチャーであるが、周辺の家屋は大方セメン瓦屋で、往時をしのばせている。他はすべてカ

ラー刷りで、各年ごとにムトウ内の光景はじめ、水浜での四ムトウ総出の豪快なクイチャーなどが網羅されている。

グラビアにつづいて、「前里ムトウヌウヤからの寄稿」18点、「前里元之屋新築にかかる活動のあしあと」「出版に向けた前里長寿会の現況」「前里ムトウの概要」「池間島のミヤークツツ由来と前里ムトウの伝承」とつづいている。

ミヤークツツは18世紀、人頭税社会に起源を持つようで、1981年1月、沖縄県の「無形民俗文化財」に選択されている。表題の「長幼有序」はムトウに掲示されている扁額に由来している。年長者と年少者の間には自ずと守るべき秩序があるという意であろうが、一般にムトウでは社会的地位や職業は関係なく、年上のウヤを敬い、年下のウヤを労る、親は子をかわいがり、子は親を敬う、ひいては親子愛、兄弟愛、ふるさと愛につながる美風(川上哲也「発刊に寄せて」)として、地域社会にまで反映しているようである。ムトウでは、喧嘩、口論は絶対にしない、無礼な振る舞いをしない、悪口雑言をしない、金銭、物品の不正をしない、刺し身や酒、菓子等を自分から食べたり飲んだりしない、全体でズンミ(吟味―協議?)したことは服従するなどが順守されているという(前掲)。

「ぼくがうまれてすぐに、おとうさんが、『げんきなおとこのが、うまれました。よろしくおねがいます』とあって、かいいんになったそうです」「ぼくも、おとなになつたら、まえざとムトウのかいいんになるそうです」(池間小1年 まつかわこう)。このように「マスマイ」によって出生届をした男子は、成人したらムトウのウヤになることが約束されているのである。現在の会員353人。

寄稿文は大方ムトウに関わる回想記であるが、なかにはムトウ内で公表されたという「カヤバタガマ物語」(伊計勇)や、「ンキヤーンヌ

ゆがたい」(島尻豊作)など、思わず吹き出してしまふ艶笑譚(えんしよ うたん)もまぎれ込んでいて、少しも固苦しくない記念誌である。前 里元はもとより「池間島民俗誌」といつてもよさそうな内容で、学ぶ ところ大である。編集・出版に関わった諸士の労をたたえたい。

(「宮古毎日新聞」二〇一五・一〇・二九)

3. 『平良市文化協会二十余年』〈資料集〉

平良市文化協会は三月三十日、市内西里のレストランクルで解散 総会を開き、二十二年の歴史に幕を閉じました。昨二〇〇五年九月三 十日、多良間村を除く宮古五市町村合併にともない、平良市が消滅し たことにもなう解散です。

平良市は一九七四(昭和四九)年、「創造する市民の文化く美しい自 然 育てあう街」をテーマに、市民総合文化祭を開幕しました。七八 年第五回、八二年第九回を終え、第十回を進める過程で、二回にわたっ て市民総合文化祭に関わった関係者による総括がなされました。その 結果、市民総合文化祭を行政主導から市民主導に移行するため、その 受け皿として文化協会を設立することになりました。二回目の総括会 議で六人の準備委員が選ばれ、八回にわたる準備委員会をへて、一九 八四年一月二十七日平良市文化協会が設立されました。準備委員長を つとめたのは、宮古郷土史研究会を代表して準備委員をつとめた当時 副会長の故平良新亮さんでした。新亮さんはその二年後の九六年四月 の総会で故宮国定徳初代会長につづいて二代め会長に選任されてい ます。

文化協会設立最初の第十一回市民総合文化祭からは平良市、同教育 委員会と文化協会の三者共催となり、児童生徒部門は行政側、一般の 部は文化協会が担当するようになりました。文化協会は八八年第十五

回からは季節を考慮して春秋の二季催し、さらに九四年文化協会設立 十周年を記念して新たに宮古方言大会(のち「鳴りとうゆん宮古方言 大会」)も催しています。同年七月には初代会長として五期十年つと めた伊志嶺亮氏が平良市長に当選したため、二代め会長には郷土史研 究会運営委員の佐渡山正吉氏が選任されています。佐渡山会長のと き 数年来停刊していた会報も「標」の表題で再開、年二回発行で二五号 まで発行されています。

なお平良市文化協会は二十二年の歴史のなかで、設立八周年「標」、 十周年「ひららの文化」と二度にわたって記念誌を発行しています。 さらに昨〇五年九月平良市消滅とともに文化協会も事実上活動を停 止しましたが、こうして十二月二十五日「平良市文化協会二十余年〈資 料集〉」を発行、市民総合文化祭とともに二十二年の歴史を跡づけて います。(「宮古郷土史研究会会報」一五四号、二〇〇六・五・一二) 〈付記〉第三代会長宮川弘、第四代会長立津精一とつづき、二〇〇六 年四月、五市町村合併で、宮古島市文化協会へと発展し現在に至って いる。

4. 宮古の自然と文化を考える会「宮古の自然と文化」第2集

「ミラクルに輝く八つの島々」

宮古の自然と文化を考える会は一九九五年四月の発足以来毎年四 回、宮古をテーマにした研究者の講演会を催している。質疑を通して 深められた十二本の論文は、二〇〇三年八月に第一集として刊行され た。本書はそれに続く第二集で、自然五章、文化六章で構成されてい る。

自然は、「宮古の歴史を見てきた生き物たち」諸喜田茂充・藤田 喜久・成瀬貫、二章「宮古諸島の不思議な動物相」太田英利・高橋亮

雄、三章「宮古諸島の鳥類研究史と鳥類相」嵩原健二、四章「宮古島におけるエネルギー作物」川満芳信、五章「宮古島の地下水保全と農業との共生」前里和洋、以上五編。文化は、一章「沖繩人のルーツをたずねて」土肥直美、二章「宮古島の水の文化」渡久山章、三章「宮古・アークの魅力」杉本信夫、四章「宮古の模合」波平勇夫、五章「ニコライ・A・ネフスキーと宮古」漢那昭、六章「宮古の戦争遺跡」山本正昭、以上六編である。

諸喜田らの論文には副題に「ミヤコサワガニの起源」が付されていて、海没したとされる宮古で純淡水性のミヤコサワガニの発見と、生息の要因を六つあげている。有力な一つに「宮古島の大部分が再び海中に沈んだが、東部の一部が陸地化したままだった」がある。さらに宮古は「地史や現存する生物相および化石動物等からみて、特異な島」で、生物学者と地質学者の合同調査の必要性を指摘している。

前里論文は、生徒とともに「農家の役に立つ足腰の強い農業と、地下水保全型農業を目指し」た研究で、水のノーベル賞と言われるストックホルム青少年水大賞受賞に至る記録。

渡久山論文は、徹底した現地調査から「自然の水の豊かさ」、その活用のために駆けた「人の力のすばらしさ」、杉本論文は「旋律の美しさから、宮古こそ「うたの島」、波平論文は「結合原理が機能する限り(模合は)なくなることはない」と、具体的事例をあげて論証している。

紙幅の都合で他はふれられないが、いずれもそれぞれの分野から示唆多く、宮古への熱い思いにあふれている。

(「沖繩タイムス」、二〇〇八・五・三二)

5. みやこの自然と文化を考える会『宮古の自然と文化』第三集

那覇市に事務局をおく宮古の自然と文化を考える会(垣花豊順会長)はこのほど『宮古の自然と文化』躍動する宮古の島々』第三集を刊行した。同考える会は一九九五(平成七)年四月、宮古の「自然環境とそこに住む人々の歴史・文化を研究し、過去を顧みて歴史に学び、現在の問題点を重視して、未来のある姿について考えるために創られた」研究会である(垣花会長「序文」)。設立以来毎年四回宮古をテーマに定期的に講演会を催し、参加者による質疑等をおして深められた内容を整理して公開されている。宮古への熱い思いの結晶である。

今回の第三集は、第一部「自然」は七章構成で、九人の研究者がそれぞれの専門領域から最新の研究成果をまとめている。第二部「文化」も同じく七章で七人の研究成果である。表紙の帯には「美しい宮古の自然と、人々の叡智を知る宮古諸島の魅力ある自然や動物、そして島民による培われた独自の文化と歴史。それらの両面のさらなる深みを探求・理解する論文集 第三弾」と明記している。

第一部 自然

「洞穴が語る宮古の自然」大城逸朗、「宮古のサンゴ礁」梶原健次・松本尚、「宮古群島の植物と自然」横田昌嗣、「ヤギの神秘」砂川勝徳、「マクガンあんちーかんちー(ヤシガニにまつわる話題あれこれ)」藤田喜久、「宮古諸島の野鳥たち」久貝勝盛・仲地邦博、「宮古よもやま話」自然と人々のいとなみ」中西康博

第二部 文化

「ツバメの方言名とその由来、及び各地におけるツバメ観」宮古からの出発」渡久山章、「『宮古人』を考える」下地和宏、「太平山小考」糸数兼治、「近世先島の土地制度」平良勝保、「宮古島市平良字西里方言の音韻」島尻澤一、「宮古島西原の年中行事をめぐって」上原孝三、「宮古の御嶽と神々」『御嶽由来記』を読む」本永清、「解題」本

書を読まれる方々へ「垣花豊順、「あとがき」長堂芳子。

「宮古人」を考える

十六人の執筆者のうち、下地和宏、平良勝保、上原孝三ら三氏は宮古郷土史研究会の会員である。紙幅のつごうもあり、概要紹介は三氏のみで、他は前記主題に止めたい。

下地『「宮古人」を考える』は、南琉球圏(宮古・八重山)の先史時代は、縄文・弥生の影響を受けた北琉球圏(奄美・沖縄)とは異なった「南方文化」系とみなされ、その前期(三八〇〇～三五〇〇年前)は土器、石器等を用い、後期(二五〇〇～一八〇〇年前)は無土器、具斧等に特徴があるが、その間およそ一〇〇〇年の空白があり、同一系統か別系統か未詳である。また後期以後およそ九〇〇年余をへて、十二～十三世紀ごろから現代人に通ずるであろう遺跡が登場し、十四世紀には外来集団とみなされる遺跡が急速にふえていく。さらに文献史料等を駆使して、この時期の集落は宮古島東部に始まって、西へと移っていく。活動の中心は「ボラ・ミヤコ」(婆羅Ⅱ保良・宮古)から、「ピサラ・ミアク」(平良宮古)と変わり、「宮古人」の呼称は定着していったととらえている。

近世先島の土地制度

平良「近世先島の土地制度」は、近世先島の租税制度は「頭懸」(ずがかり)と称したが、近代に入って人头税の変種の一つと考えられ「人头税」と呼称されるようになった。数え十五歳以上五十歳未満が納税者で穀物と反布を納付したが、村の位と年齢によって負担割合は決まり、「負担者の住む村や年齢の位付(階層)によって負担割合が違うが、住む村と位付が同じであれば等分であり、「土地が平等に配分されていなければ、負担額に厚薄が生じることになる」が、近世の土地制度はまだよくわかっていないとした上で、残存史料や先学の調査・研

究成果を紹介しつつ考察を試みている。

他方、近世社会では「急激な人口増加があつて、「土地の囲い込みを招き、耕作者の強弱により、耕地の所持が各家族によって広狭が生じていった」、末期には「人口が増加し、開墾可能な土地が少なくなっていたために」、「新たな開墾も困難で、再配分もできなかったとすれば、貧富の差は増大していく」と考察している。

西原の年中行事

上原「宮古島西原の年中行事をめぐって」は、冒頭、西原は一八七四(明治六)年、池間島と佐良浜からの移住者による村で、首里王府の最後の強制移住村。この三地域は自ら「池間民族」を称するほどに「同一血族の意識」をもち、「地名・聖地・屋号・年中行事などに重複がみられる」が、それぞれに「独自の発展をしてきた」と、仲間弘雅編著『西原創立百周年記念誌』(一九九四年)に依拠しながら紹介している。

県内集落の大方は伝統的行事は旧暦によって行われるが西原も同様である。多くの行事は集落で公式に認定されたヒューイトウイ(日撰り取り)が吉日を選び決定し、祭祀集団が参加する行事とそうでない行事とに大別できる。祭祀集団が参加する行事は「カンニガイ(神願い)」祭祀とよんでいる。行事は、御嶽、ジャ(座)・ブンミヤ(公民館)、十字路、海辺などでおこなわれるが、多くは「御嶽・座」という聖空間域を中心に実施され、「神願い祭祀儀礼には歌謡を伴うことが多い」ようである。

神司(ニガインマ)は、大司、中司、サス、供母と五人がいて「御嶽をめぐる村落レベルの祭祀」は、年に四五もあるようで、このうち五つには集落の五十～六十歳の男女(ナナムイヌウヤ・インマ)がオハルズの御嶽に「お願」をする、男性のみの「シープ(歳慕)」もある。

このほか、祭祀の日振りと祭祀への参加と告知方法など、神願い行事の順序と構成内容、定時的な年中行事、支部、里レベルの行事など詳細をきわめている。「年中行事は年間のサイクルで繰り返され、ある一定の形式を持つ」ており、「中心は農耕祭祀儀礼関係」で、「豊作」「豊漁」「村人の健康」など。「外界からの魔物や悪神を追放し、善神を招いて祈願する理念が明瞭といえる」と特徴づけている。

なお第一集(二〇〇三年)の表紙には「永続的に繁栄する美しい島々」、第二集(二〇〇八年)には「ミラクルに輝く八つの島々」の副題がつけられている。

(「宮古郷土史研究会会報」一八八号、二〇二二・一・一二)

6. 『時代(とき)を紡いで〜宮古の女性たち』

「時代(とき)を紡いで〜宮古の女性たち」を感銘深く読ませてもらった。平良市企画室男女共同参画班によって編集された、宮古のその道の草分け、あるいはその道一筋の女性たちの紹介である。

収録された女性たちは明治十九(一八八六)年〜昭和五(一九三〇)年生まれまでの四十五人。すでに物故した女性もいるが、いまなお現役で後進の指導に当たっている女性もいる。教職、理容、美容、洋裁、福祉、保育、舞踊、そばづくり、味噌づくり、海ガメの保護、助産婦、医師…と、「真摯に生きた」多彩な女性群像である。一読して、当然のことながら、うわべは男性社会のようにみえる、この宮古も、実際には有名無名多くの女性たちによってしっかりと支えられていることを教えてくれる。ひとは何人も父母から生まれ、それぞれにその特性を生かして社会活動をいとなむ―男女どちらが欠けても成り立たない、平等の存在であることを今さらのように考える場ともなる。

B五判、一三八頁。取扱い・働く婦人の家。二十九人の執筆者、五

人の編集委員の労を多とし、広く活用されることと併せて、ひきつづき埋もれた女性の掘り起こしが進められることを期待したい。記録された女性と活動分野は次のとおり。

与那覇カマドメガ 万古山御嶽を開創・多くの人々の心を救った
大山キク子 初の女性市議・宮古婦人連合会初代会長として活躍
下地 シズ 宮古初の女性議員・幅広い活動で女性のリーダー的存在

伊是名ツル 天職を全うして産婆から助産婦へ

三島 秀 宮古初の洋裁学校を設立「愛と和」をモットーに奉仕に捧げた半生

佐和田カニ 島の物知りばあさん、宮古の民話の語り部として百話近い話を残す。

島田 初枝 道なき保育の先駆者・慈しみ深き行動で子らを保育
砂川 フユ 戦後沖繩の婦人運動の先駆者―県下初の女性校長。

友利アイ子 女性運動家のさきがけ、初の平良市議会女性議員
源 ゆき子 戦後の女子教育推進・働く女性たちの権利獲得・保育所増設運動などに尽力

伊志嶺 文 「なるようになるさあ」を信条に五七年続く年中無休

の伊志嶺文商店の主
金井喜久子 沖繩メロディは世界の宝、沖繩音楽の普及に一生を捧げた

砂川 トヨ 戦前・戦中・戦後と四〇余年看護業務一筋に生きた
根間カマド 五五年間ひたすら宮古そばの伝統の味を伝え続けた。

下地 ハツ 宮古上布を織ることは天職「きれいに織ることが楽しかった」

下地 竹 宮古女子教育のパイオニア―高校教育初の「男女共学」

の指導に従事

新城 菊「音楽には人の心を捉える神秘がある」コーラス指導などに尽力

野村 チヨ「異郷の地でしなやかに時代を駆け抜けた那覇の女
岡本 福子「戦後の混沌とした中で保育に携わり子どもたちに感謝の心を育む

親泊 文「百年の歴史を支えた思い」守り抜いた父の遺言」

久田 カナ「舞踊人生七十年、琉球舞踊不毛といわれた地で一心に舞踊に勤しむ

平良 利子「宮古高等女学校創立時教師として尽力
中松 秋子「戦前・戦後花嫁の日本髪を美しく装わせた美容師

佐久本チヨ「バーキ姿はなくなっても：現役の「のんびり商人」
新城 マツ「子ども達を育てられたのは宮古上布のおかげ」

砂川 米「家庭科の男女共修に尽力し、島の薬草」なたてい茶」を開発

名渡山裕子「宮古初の女性医師誕生・五十年余に亘って医療の道ひとすじにあゆむ

池村 秀「美しい音楽が人生を支えることをみんなに教えたい
根間 タケ「ウミガメの故郷を守る」思い出の海岸

山内 秀子「戦中・戦後を通して六十年宮古初の女性歯科医師として地域医療活動に貢献

安谷屋みや「戦後の混乱から復興していく宮古で洋裁技術の普及に尽力

大里 サダ「糸紡ぎから伝統工芸品創作へ、飽く事を知らない魔法の手

仲間 克江「善は愛と勇氣から」がモットー、夫と二人三脚でボ

ランティア人生

下地 キヨ「宮古みその味を伝えて
富永晟恵子「大先輩たちを束ねて宮古婦人同志会を創設

根間 サダ「理容一筋五十年体が続くかぎり楽しく
下地 文「教師退職後も幅広い社会活動で女性たちをリードする

友利ヨシ子「戦前、ボルネオで鏝節製造に携わる

山里 ハル「訪問ヘルパーの草分けとして福祉の第一線で活躍
譜久島吉子「季節保育所から避地保育所・公立保育所へ

武本 竹「昭和中期の宮古の女性たちの憧れ美容師として活躍
真壁 カツ「県下初の中学校女性校長、今も輝き続ける女性リーダー

与那覇ハル「自然の恵み、先人の知恵を掘り起こして農漁村の生活文化の向上に尽力

内山 キヨ「宮古珠算教育の草分け珠算一筋五十年・生涯現役
洲鎌 ツル「稲石」の直系十三代目・工房「藍風」で上布を織る

(「宮古郷土史研究会会報」一三九号、二〇〇三・一一・一三)

7. 池間文化協会 池間島の「すまびとう列伝」

池間文化協会(川上哲也会長)は、先ごろ池間島ゆかりの有名・無名の人物三〇〇余人を網羅した「すまびとう列伝」を刊行している。大方の人は本書を手に取り「目次」に目を通してただで目を見張ってしまうのではなからうか。そこはまさしく表題どおりの、池間島の近現代を生きた多彩な「すまびとう列伝」なのである。

1. 「全池間島人物事典」

本文と資料編で構成されており、本文は十二章中一〜十一章が人物

編、十二章は「原風景の記憶をシヌツ・ヌ・ナガ(永遠)に…」と題して、人物群すべてが関わっているであろう池間島の特色ある様々な景観や地名、近代以降の歴史的事項(件)等が網羅されている。

人物編には、各章ごとに収録された人物群に関わるであろう一言表題が示され、さらに登場人物三〇〇余人の一人ひとりの人柄や特性、屋号、業績等に至るまでの人物紹介である。「映画館・サンゴ記念碑・珊瑚タワー生みの親・上里登」(一章)といったぐあいに示した上で、さらに詳細な紹介に入っている。

「巻末の資料編のひとつ、一九六〇年以降の池間島の「人口動態」によると、もつとも多い年の世帯数は二〇〇〇年の四八一、二〇二〇年現在は三五一世帯であり、収録された三〇〇余の人物群には、親子、兄弟、姉妹もいて、その配偶者等を考慮すると、すべての世帯が網羅されているのではなからうか。

故人ばかりではなく現役の青壮年も多く、さながら「全池間島人物事典」といっても過言ではなさそうである。

2. 各章の「表題」

各章を包括する表題は次のようにきわめて具体的である。

一章 今も語り継がれるスマビトウ(人々) 24人、二章 島を守り育てたンキヤーンヌウヤタ(先達) 20人、三章 インシヤ(海人)一筋に生き抜いて 31人、四章 島の軌跡を刻んだカナタイムヌ(猛者) 30人、ミヤークツツ先輩から後輩へのメッセージ池間中学校講話会 5人、五章 島ナーギ(誉れ誇る)自慢あの人この人 3人、六章 個性豊かなミツブアイ アリーヌ(人物)を訪ねる 34人、七章 スマダツ(自治会・組合・老人、郵便局等)に携わった同胞 23人、八章 ミドウンミ(婦女子)の光る力が地域を支える 32人、九章 著書で証す島のハガツ(鉛筆)文筆家 18人、十章 国・県・地方公務

員でトウユマヒイ(響く)鳴らした面々 26人、十一章 学校現場で汗を流したシンシイータ(先生方) 26人、といったぐあいである。

このような表題のもとに、三〇〇余の一人ひとりについて個性ゆたかに各自紹介されているのである。きわめて恣意的だが、次に各章から各一人紹介すると、次のような面々がおられる。

3. 各人の個性・屋号まで：

1・語り継がれる10名子育てのおしん川上メガ、2・一〇〇年前コレラ騒動に島を閉鎖した最高指揮官仲間屋真、3・初めてヤビジの名称を世に出した伊良波富蔵、4・南方漁業に従事し世話好きな川上荘之助、5・宮古民謡界の重鎮で講師や審査員で多忙極まる波平重夫、6・世に初めて「池間民族」を発信した頭脳明晰の我那覇古典、7・池間大橋建設に口火を切った友利金助、8・アガンミ・ヌ・フンマで名高くクイチャー座の唄い手親泊文、9・大学教授、研究者がすがった民間学者の物知り前泊徳正、10・宮古の県・市行政マンとして敏腕を篩った新里武満、11・記憶力抜群で幼少期に眠る話題を世に広げる石原信一…。

登場する三〇〇余の人物群すべてが重複なくこのように一口紹介から始めている。

いみじくも池間島在住、詩人の伊良波盛男氏が巻頭に明記している。「よくもこれだけの池間人を寄せ集め、しかもその人物にふさわしい的確なコメントを付して壮観なる池間人列伝となっている」「さまざまなたまな持ち味の人物を通して池間島の歴史や民俗文化の資料的価値の高い民俗文化誌として他に類書がない」と言いきっている(「序文壮観なる池間人列伝」)。もはやこれ以上の賞賛の言葉は必要ではなからう。

4. 50余年の収集資料を反映

川上文化協会長は大学を出た「一九七一年、初赴任の平良市大神中学校で島嶼へき地の子ども達へ情報提供をねらって新聞切り抜き」を始め、その後、「福嶺、平良、佐良浜、上野中学校でも継続し」、一九八五年からは「池間島を中心に人物、文化、地域、趣味と広げ今に至り五〇年」も経過している（「おわりに」と明記している）。

このような川上会長の三〇〇冊余のスクラップブックを整理し、さらに関係する人びとへの聞き取り、整理、編集に携わった編集委員の労を多としたい。感服するばかりである。

なお池間文化協会は一九九七年八月設立以来次のような「記念誌」を出している。これらを基礎にしての「すまびとう列伝」への発展であらう。

設立記念誌「とびら」（一九九七）、「ふるさと池間の暦」（一九九八）、設立一周年「ふるさと自慢あの人この人」（一九九八）、創立四周年「カメラで見た池間島の素顔」（二〇〇一）、設立二〇周年「人間ドキュメント」中学生が恐怖の漂流八時間（二〇一七）。小さな離島中の離島とは思えぬ「壮観」さである。

（「宮古郷土史研究会会報」二四二号、二〇二一・一・一一）

8. 宮中17期生「戦中・戦後を生ききて」

ことし創立七十周年を迎えた宮古高校の各期卒業生による記念誌があいついで発行されているが、旧制宮古中学最後の卒業生、十七期生の卒業五十周年を記念する『戦中・戦後を生ききて』がこのほど発行された。巻頭には、大山高春同期会長が「記念誌発行に当たって」を執筆している。太平洋戦争真最中の一九四四（昭和十九）年四月に入学したが、あこがれの中学校での学業へのスタートというより、戦争への突入であり、厳しい食糧難とのたたかいであった、一〇五人の同期

入学生のうち、戦後一九四八年三月、四年生を卒えたのは七九人になつていたことをふれ、「否応なく戦争に苛まれた中学時代」であった、「それでもたくましく生きて来た十七期生」の思いを凝縮した記録である、と記している。

十六ページにもものぼる「思い出の写真」のページには、入学当初の母校の正門全景、入学間もなく鉄血勤皇隊として強制的に軍隊に編入され、布陣させられた俗称ザラツキ嶺一帯、戦後ようやく解放され、学業を再開したソノリ嶺の海軍兵舎跡や農業試験場跡、作業させられた海軍飛行場跡（現宮古空港）から現在の同期生同士の各種催しまでの写真で飾っている。

在学中の「思い出」には、「入学、疎開、復学（生死をさまよい、親友を失う）」、「宮中入学」ソノリ山「農業試験場での青春」「戦争中の宮古」「思い出は戦争と共に」など、三十八人が寄稿、ほかに七人が「メッセージ」をよせている。さらに大山会長ら十人による座談会は、「分散授業から鉄血勤皇隊」「艦砲射撃」「終戦の前後」「戦後の学校再開」「白紙同盟」ストライキ」の小見出しをたてて、四年間の学園生活を浮きぼりにしている。

最後の「資料」編には、仮校舎の全景スケッチ、卒業証書、辞令、認定証等の写し、疎開状況、名簿、昭和十九年四月～二十三年三月の年表、当時の職員名簿、教授時数、発刊趣意書等が収録されている。なお卒業証書等に記された校名は、一九四七年四月は「宮古高等学校」、一九四八年三月には「宮古男子高等学校」と西暦で記されている。一九九八・八・二六発行、B5版一四六頁、非売品。

（「宮古郷土史研究会会報」一一〇号、一九九八・一二・一四）

9. 宮中20期・宮高四期生会『それぞれの軌跡』

一九八八(昭和六十二年)五月、卒業四五年を記念して『われら昭和の端境期』を刊行した宮古高校四期生会(会長 前里盛雄・野原健)が十五年をへて、さらに六十周年記念の『それぞれの軌跡』を上梓された。前著が主として「青少年期の思い出の記録」であったのに対し、今回は「その後の壮年、熟年期をどう生きたか、喜寿を過ぎてこの先どう生きようか」など、文字どおりその後の「それぞれの軌跡」を同期生間の好であろう、率直に記している。

高校卒業後、四五年、六十周年と二度も部厚な記念誌を出すのは、宮古高校創立以来初めての出来事のようにある。

1、「皇国臣民の道」……

宮古高校四期生とは、敗戦二年め、一九四七年四月、旧制宮古中学校最後の入学生(二〇期)である。最年少は一九三四(昭和九)年四月二日～三五年四月一日生まれ。この世代は「十五年戦争」真只中、四一年四月、明治以来、普通教育の基本である尋常高等小学校に代って登場した国民学校(初等科六・高等科二)最初の一年生である。「教育勅語」を一層徹底させた皇民教育―「皇国臣民の道」をすべての教科とおして教え込まれた。一言で言えば、成人すれば天皇の兵士として戦場に出て、天皇のために一命を捧げることを至上任務とする教育であった。

2、「昭和の端境期」

一九四四年八月、通常ならば夏休みに入るころ、宮古は戦場必至とみなされ、三つの軍用飛行場を中心に全域に軍事基地が構築されて、三万余の陸海軍将兵が展開した。各学校は接収されて兵舎や野戦病院に転用され、あるいは解体されて陣地構築用材にされた。同じころから軍の食糧確保など、作戦上の理由で、多くの老幼婦女子は台湾や九州へ強制疎開である。十月十日の初空襲以後、翌四五年八月の敗戦ま

で一年近く各学校は大方休校状態であった

米・英軍の連日の爆撃、海・空の輸送路を絶たれて衣食住など極端なモノ不足、マラリアなど疾病の大流行の渦中での敗戦である。米軍の全面占領下に価値体系の逆転、諸制度も改変される。四六年六月、国民学校は八年制の初等学校となり、翌四七年四月、六年生以上のかには宮古中学校や女学校を受験し入学するのでもである。校舎は戦災で使用できず、農事試験場(現カママ嶺公園)の仮教室であった。さらに四八年四月には本土に準じて「宮古教育基本法」等が制定されて、「六・三・三制」が施行された。他府県に遅れること一年、現行小学校六年、中学・高校各三年制の始まりである。旧制中学一・二年生は新制宮古高校中学部二、三年生への進級だが、翌四九年四月、新制中学校の卒業生が受験する前に、それぞれ一年飛び級させられている。

このため六年生までは同期であったのに、新制中学から高校を受験した者は一期下に、くわえて戦争による勉学の遅れ、それに外地引揚者など編入学に一定の支障を生じたようである。四期生は四歳差の年齢幅があるという。

文字通り時代に翻弄された「昭和の端境期」の世代である。

3、多彩な社会進出

卒業後の進路は高等教育機関も、これといった職場もない宮古では、各期とも共通するであろうが、一旦は宮古外への進出が圧倒的である。教職(小・中・高・大学)、公務員(市町村・県・国)、医師、弁護士、報道、出版、運輸(陸・海・空)等々、きわめて多彩である。

日本を代表する一流企業に試験採用され、母校の大学総長を保証人に、海外出先機関の責任者等をへて幹部役員に昇りつめた「わが人生はツキの連続」、また、医師として県外で定着し、二つの医療法人の傘下に多くの医療施設を擁して、従業員およそ一〇〇〇人、年収およ

そ八〇億円余と記す「ヨナハグループの概要と沿革」。

国家公務員としての管理職を請われるままに四十三歳で退職して地元民間企業に転職し、三十年後、宮古への出入客・観光客ともに五倍増にした「僕の壮年期からの足跡」には、法螺吹きでない実話、滅私奉公・ムテマードバンマイ、那覇移住・日々是好日、天命か、地球を救う、などの興味をそそる小見出しが付いている。喜寿を過ぎた、そのかみの若者ら三八人の回顧談ならぬ現況報告である。

このほか各「軌跡」の末尾に一話読切りのコラムが付いている。本来そこに必要であったかのように、空白を埋めている。周知の宮古史の様々な話題を十四点、数百字でいどでの挿入である。たくまずして宮古歴史へのよき導入にもなっている。編集の妙といえよう。

4、「第三集」発行を予告

宮古からの「紙上参加」を加えて十六人による「座談会」も収録されている。日本人男性の平均寿命七八・五歳の渦中であって、さすがに現役は少なく、ウォーキングや体操、ゴルフ、カラオケ等による日常生活が中心ではあるが、そこへ至る四期生の軌跡にはひかれるものがある。宮古中学二〇期生として入学したのは一二〇人、その後新制中学から十七人が加わったが、転校その他様々な事情で実際に卒業したのは八七人だという。

現在会員は七九人。このうち地元宮古に在住する者十九人、沖縄本島五〇人、県外十人。物故者四二人、さすがに三分の一は他界している。それでも編集後記には、「役員会では十年後、第三集発刊の提案」があったと明記されている。「端境期」に生きる同世代として「天晴れ宮古人たち！」と賞賛するばかりである。

（「宮古郷土史研究会会報」一九一号、二〇二一・七・一三）

10. 「宮古農民弾圧事件50年『騒乱罪』無罪判決40年記念誌」

今から五十年前の一九六五年七月二四日、平良のまちの三通りは、大変な騒ぎに包まれていた。那覇から派遣された武装警官隊も加わって拳銃を発砲し、カービン銃を振りまわして、製糖会社の合併に反対する農民大衆を弾圧していたのだ。

あれから五十年、宮古郡農民のたたかいの教訓を記録に止どめ、後世に伝えるべく、二〇一五年四月、「宮古農民弾圧事件を語る会」を発足させた。七月二四日には、五十周年の節目を記念して、この事件をしっかりと語りついでいこうとの「声明」を発表し、十二月「資料集」を発刊した。事件の詳細とそれらへの取り組み等については「資料集」（記念誌）に大方網羅されており、それに目を通していただくことにして、直接見聞した関連する幾つかの話題を紹介したい。

1. 「騒乱？」状態の三通り

一九六〇年代は周知のように、米軍の全面占領下、国内はもとより国際的連帯のもと、歴史に残る壮大な「祖国復帰」（沖縄返還）運動と結びついて、「主席公選」並びに「自治権拡大」要求など、県民の命と暮らしに関わる様々な運動が展開されている。

米軍は県民の運動を押さえ込むために、「アメとムチ」の弾圧、懐柔策を打ち出していた。米軍最高司令官（陸軍中將）を高等弁務官と称し、米軍政府を琉球列島米国民政府と称して、如何にも軍政ではなく民政であるかのように装いながら、沖縄における「自治は神話である」と、県民自治を否定し、経済面では基幹産業であるサトウキビ代を引き下げ、製糖会社の合併、合理化を押しつけてきた。アメリカ国家資本である琉球開発金融公社（開金）の支配下におくことをねらっていたようだ。

一九六五年七月二四日、宮古製糖、伊良部製糖、宮多製糖の三社合

併を決議する株主総会場前で、警官隊の警棒で殴られた群衆が怒って、身近にある石ころや棒切れを投げつけたことから、警官隊はさらに拳銃やカービン銃を持ち出して威嚇発砲する。株主総会場に予定された琉映・沖映両映画館に通ずる市場通り、下里通り、西里通りや関連する小道まで群衆と武装警官隊のにらみ合い、時には警官隊が群衆を追いかけるなど、大変な騒ぎに発展した。

2. 群衆を追う武装警官隊

当時の職場はレストラン・クールの向かいの、現在駐車場にされている所に、宮古教職員会館があったが、仕事の区切りがついた夕方五時ごろ、遅い昼食を取るために、いつものように市役所裏通りにさしかかったとき、前方の住屋御嶽の前で、二、三人の警官がカービン銃を頭上に振りかざして、大きく左右に振り、何か大声で怒鳴っている。何を言っているのか聞き取れず、そのまま前進していくと、怒鳴り声は一層大きくなり、カービン銃を高くかざして左右に振る動作が愈々激しくなる。どうやら来るなど言っているようだ。

警察署を囲う高いコンクリート塀には、武道場の暈であろうか、びっしりと立てかけてある。群衆の投げるかもしれない石ころや棒切れへの対応であったろうか。警察署に近づくのを制止しているらしいと受け止め、今は駐車場になっている山小さんの東の小道から西里通りに抜けたところ、そこにはおびただしい石ころや棒切れが散乱して一いる。その中を東の方へ走る群衆を武装警官隊が追いかける。しばらくすると、一定の距離をおいて群衆と警官隊がにらみ合う。すさまじい光景であった。両側の商店はすべて大戸がおろされていて、帽子屋さんであったか、大戸の上の方に見える穴は、後日知ったことだが、カービン銃の弾痕だとのことであった。

3. 「事件」一月後の逮捕

当日は二人の若ものが現行犯逮捕された。すさまじい拷問をされたと、釈放後、人権協会に訴えるなどの事例もでていた。それでいてなぜか当日の逮捕者は一人も起訴されていないようだ。

ところが事件後一カ月も経過した八月末から九月初めにかけて、七人の農民活動家が次々と逮捕される。四〇日も留置・拘留の末、七人とも騒擾(騒乱)罪容疑で起訴されている。製糖会社の合併に反対して集会を開き、交渉し、坐り込みさせたこと等が、平良のまちを騒乱状態に陥し入れるために計画し実行したことにされたのである。

沖縄県祖国復帰協議会(復帰協)に結集した農民協議会や労働組合は直ちに不当逮捕に対して抗議行動をおこし、釈放運動を展開した。なかには差し入れ弁当にビニールに包んだ激励文をしのばせて、外部での支援活動を伝え激励したのもいる。被告のなかには四十日間黙秘を貫いたのもいる。

4. すべて「祖国復帰」運動の一環として

被告団の拘留中に取り組まれた同年十月の下地町長選挙、平良市議選挙は労農共闘会議推せんの一候補が全員当選している。サトウキビ代引き上げ要求、製糖会社合併反対運動から、農民弾圧事件への一連の取り組みは、その後の各種選挙、各種運動を「祖国復帰」運動と大きく関わらせて前進させている。

一九七二年四月、宮古巡回裁判所は全員有罪としたが、一九七五年五月、福岡高等裁判所那覇支部は全員無罪とした。平良のまちに騒乱状態があったとするなら、徹夜で坐り込んだ農民を警棒で殴りつけ、カービン銃を発砲した警官隊が引き起こしたとも受け取れる。宮古農民、郡民の画期的な勝利であり、その十年にわたる「農民弾圧事件」の全貌を伝える「資料集」である。

(「宮古郷土史研究会会報」二二三号、二〇一六・三・一五)

11・宮古島市文化協会設立10周年記念誌『文化の光 満つところ』

宮古郷土史研究会も加盟する宮古島市文化協会(大城裕子会長)はこのほど、設立10周年の記念誌『文化の光満つところ』を出版しました。宮古島市文化協会は一九八四年一月設立された平良市文化協会の二十余年の歴史を踏まえ、二〇〇五年十月、平良、城辺、下地、上野、伊良部五市町村合併までの文化行政を引きついで、翌二〇〇六年四月に設立されたものです。展示、舞台発表両面からなる市民総合文化祭を中心に、文字通り「文化の光満つところ」を反映した、多彩な十年のあゆみが紹介されています。

1・九部構成の充実した編集

大城会長の、宮古の「先人の智慧や豊かな精神文化を継承しつつ、その良さを磨き上げて発信し、宮古独自の先人の魅力あふれる新しい文化の創造の一翼を担う文化協会でありたい」「市民の心豊かな生活の実現のためにも『文化の光満つる島』を目指し、多くの皆様とともに手を携えながらこれからも歩んでまいります」との文化協会のあるべき姿を示す「発刊にあたって」のあいさつについて、次のように九部構成からなる充実した内容です。

第1部「宮古島市文化協会設立十周年に寄せて」は、宮古島市長、同教育長につづいて、沖縄県、石垣市、多良間村各文化協会の紹介を兼ねた祝辞。

第2部「記念事業、記念式典、祝賀会」は、「10年の歩みを確認し発展へ!」「心豊かな文化の島宮古島へ」。「宮古島市文化協会10年の歩み」が、一目瞭然というふうにとめられている。

第3部「宮古島市文化協会の歩み(二〇〇六〜二〇一五年)」で、市民総合文化祭はじめ、各種取りくみがより具体的に紹介されている。

第4部「宮古島市文化協会部会活動及び文化祭紹介」で、各部会こ

とに部会長が発言している。書道―筆文字に親しみを、美術―暮らしの中に一枚の絵を、華道―暮らしに潤いを、部会の発展を願う、茶道―「茶道部会」の取り組み、写真―写真文化を高める波を広げたい、音楽―音楽の明日への希望、児童文化―舞台を通し喜びを共有する場に、園芸―島を花木でいっぱい、芸能―光陰矢のごとし、織物―伝統工芸、島の文化を守って、盆栽―盆栽技術、全国レベルに、生活文化―伝統料理を掘り起こしつつ、文芸―先輩たちの心意気に学ぶ、郷土史―宮古の歴史や文化への興味を市民に、方言―方言を次世代に継承していくためにできることを、芸術劇場―心に残る舞台を届けたい、以上十六部門の部会長による部会紹介が、そのまま全体としての市民総合文化祭を構成していることをみごとにうかがわせている。

第5部「自主事業」、鳴りとうゆんみゃーく方言大会(第13〜23回)、魅力再発見!宮古の織物(交流会で織物の魅力再認識)、みゃーくワークシヨップ(衣・食・住・言語)、すまふつ継承事業(平成27年度・平成28年度)、ボランティア養成講座などが取り組まれており、「方言の保存継承」が強調されている。

第6部「沖縄県文化協会賞(二〇〇六年〜二〇一五年)」、平良市文化協会当時は、個人功労賞が十一人、奨励賞六人、団体賞は八団体を受賞している。宮古島市になってからは、個人功労賞が十一人、奨励賞七人、団体賞が八団体と、数多く受賞し、毎年合同祝賀会が催され、各分野への励ましにもなっている。

第7部「文化活動を振り返って」は、十周年への祝辞であろうが、寄稿者はいずれも平良市時代からの役員であるが、単なる回顧ではなく、現在につづくその時々的重要な事柄が紹介されている。

第8部「すまうむい」の寄稿者は歴代の役員ではなく、それぞれの分野で現役の実務者たちの現場からの発言になっているといえよう。

文化協会十周年にふさわしく、よき提言となっている。天久勝彦「宮古民謡のさらなる発展を」、伊志嶺節子「島の宝と共に」、伊良波盛男「池間島バイリンガルの未来像」、伊良部喜代子「ふるさと」、垣花鷹志「母との思い出」、下地イサム「二度と戻らない時間『故郷』」、下地暁「命のふるさと」、高橋尚子「愛す生まれ島みやこ(宮古)」、豊島貞夫「ふるさと雨に濡れる心地好き」、長崎佐世「I LOVE 伊良部/W E LOVE 宮古島」、仲地清成「文化薫る島」、根間郁乃「『まもり、ふれ、うるおす』ということ」など、この種の記念誌にはめずらしくというより、むしろかえってふさわしい提言になっていることを重ねて指摘したい。

第9部は「資料編」で、宮古島市文化協会設立趣意書、協会会則、会員(個人・団体・賛助)名簿である。「編集後記」で、一九七四年行政主導の市民総合文化祭、一九八四年、文化協会設立・民間主導による市民総合文化祭、一九九四年、第一回方言大会(現「鳴りとうゆんみゃーくー」)、二〇〇五年、宮古島文化協会と、「十年」ことに大きく飛躍する文化協会ですが、根っこにある『豊かさを求める精神』のあり様は、そう変わっていない気がします」と、「佐渡山」署名の「編集後記」は明記しています。

米・英軍の連日の猛爆で焦土と化した敗戦直後の、衣・食・住にも事欠き、情報にも飢えていた当時の若もものたちが自ら発表する場を求めて模索し、「文化立島」「強力なジャーナリズムの形成」等を求めた思いは、キチンと受け継がれているということでしょうか。

(「宮古郷土史研究会会報」二二二号、二〇一七・七・一〇)

12. 『宮古毎日新聞六十年史』

「宮古毎日新聞六十年史」を読んだ。同紙は一九五五年九月の創刊

である。大正初期に始まる宮古の新聞の歴史上初めての活版印刷、日刊紙としての栄誉を担っている。それ以前の宮古の新聞は戦後十年へてもなお一日おき、あるいは二日おき発行が一般的であった。日刊紙の登場は情報の即報性を期待する大方の読者に歓迎されたことであろう。

1. 圏域を代表する新聞

二〇〇七年十一月には「宮古毎日新聞五十年史」を刊行している。五〇年の歴史をきざむ新聞も宮古では初めてのことである。それからさらに十年へての六〇年史である。五〇年史の「姉妹編」を明記しながら、なぜか五〇年史は『郷土史の一部といった理念があったようだが、』と、よそごとのように明記している(「序文」?)。巻末には五〇年史編集委員会当時の編集委員長を顧問、同事務局長を編集委員と記しているだけに、気になる表記である。まして読者あつての新聞である以上、地域史とは不可分に関わって当然であろうとも思うからである。

巻頭の、社是、経営方針、編集綱領、社員心得等に始まって、社長あいさつ、歴代社長、現役員の紹介等は、五〇年史とほぼ同様だが、つづくその後の十年の社の歩みを示す十頁にわたるグラビアは圧巻である。平良の市街地の主要十字路に面して、新型輪転機を据えつけた新装三階建ての印刷センター、隣接する4階建て新装なる社屋、すべて宮古の新聞の歴史上画期的なことばかりである。一九五五年九月創刊当初はウラオモテ2頁建て、二〇〇〇部発行を目標にしていたようだが、今や毎日十頁建て、公称一万七〇〇〇部発行と伝えている。県紙ならぬ人口数万の地域紙としては稀有な、日本新聞協会に加盟するほどに発展し、名実ともに圏域を代表する新聞といえよう。

2. 「郷土に根ざした新聞」

本編は三編構成で、第一編は「宮古毎日新聞社の歴史」、第二編は

「十年間の宮古島の出来事(二〇〇六年～二〇一五年)」、第三編は「本社の主催事業」で、さらに資料編として、会社機構の組織図、社員名簿、年表を付し本編の理解をたすけている。年表は一九五五年創刊時から始まっている。

第一編「新聞社の歴史」は六章構成で、1草創期(12項)、2存亡の危機(4項)、3礎を築く(9項)、4新時代の幕開け(9項)、5世代を超えて(10項)、6拡充する施設(3項)、「むすび」につづけて、歴代社長の略歴を紹介している。真栄城徳松、池村恵信、山内朝保、山内啓邦、真栄城宏、平良覚の六代。

第二編は、五〇年史の後をうけてその後の十年、宮古圏域の各種出来事―紙面で扱った主要記事が年次ごとに紹介されている。さながら地域史をよむようで、後につづく年表によって一層鮮明に跡づけている。

第三編「主催事業」は、「郷土に根ざした確かな視点」(「編集綱領」)、「郷土に根ざした新聞」(「六十年史」あとがき)を標榜しているだけに、きわめて多彩である。宮古では戦前戦後を通じてこれほど多くの事業を手がけた新聞社は外にならう。大方は「全宮古」を冠しての事業であるが、冒頭のみ付し、後は省略した。次のとおりである。

全宮古本因坊戦Ⅱ一九七九年、書道展Ⅱ一九九〇、市長杯サマー囲碁まつりⅡ二〇〇一、少年少女将棋大会Ⅱ一九九七、平良好児賞Ⅱ一九九七・二〇〇五～一四、親子ふれあい手作り広場Ⅱ28回・二〇一五年。

少年サッカー大会Ⅱ一九九三年、小学生・中学生卓球大会Ⅱ一九九八、宮古毎日親睦ゴルフ大会Ⅱ一九九八、レディースバドミントン大会Ⅱ二〇〇二、軟式野球選手権大会Ⅱ二〇〇三、青少年健全育成剣道大会Ⅱ二〇〇七年。

3. 「中興の祖」:

大正期に始まった宮古の新聞界は戦後初期までにおよそ二十有余創刊され、いずれも短命で興亡をくり返している。財政規模が貧弱で、各種選挙のつど政争に巻き込まれていたからであろう。「宮古毎日新聞」として一時期例外ではなかったであろう。一九八二年、山内啓邦社長(のち会長)、真栄城宏副社長の登場で悪弊から脱し、今日の隆盛の基礎が築かれたのではなからうか。山内社長は弁護士として那覇に法律事務所を開いており、実務は大方真栄城副社長(のち社長・会長)にゆだねられていたのではなからうか。

手始めに、三大目標―購読者名簿の整理と確認、配達網の整備、読者の拡充に取り組み、ついで紙面の刷新、財政の基盤づくりへと進んでいる。大方の主催事業もこの時期に始まっている。まさに宮古毎日新聞「中興の祖」と言っても過言ではない。今後とも政争に左右されず、「郷土に根ざした確かな視点」を堅持し、読者(民衆)に依拠して、ジャーナリズム本来の責務である権力批判を堅持して行くことを期待したい。

亡くなった人にはもはや言い訳も釈明も反論も、自説を主張することさえできない。故人について語るとき、どの程度なら許されるのか、本書に登場する人物群をみて、日ごろ気になっていることについて、改めて考え込まされたことを付記しておきたい。

(「宮古郷土史研究会会報」一三四号、二〇一九・九・一七)

13. 『占領下の奄美・琉球における教員団体関係史料集成』

先の大戦では宮古は三つの軍用飛行場を中心に全域軍事基地化され、およそ三万の陸海軍将兵が展開した。地上戦こそなかったものの、連日の米・英軍の猛爆と艦砲射撃で、平良のまちをはじめ、集落の大

方は焦土と化した。米軍の占領行政は一九四五年十二月八日開始されるが、人びとは国・県との関りなく「自立」を模索していた。明治以降の沖縄県宮古支庁長を会長とする、官制の宮古郡教育委員会は一九四六年九月、「宮古教育組合」に生まれ替った。事業方針の筆頭に「教員の経済的、社会的並に政治的地位の向上」を掲げ、初めて開設された宮古郡会議員に委員長を推薦するなど、活発な活動を開始したが、教員組合は米軍の許可が得られず、一九四七年七月、改めて「宮古教育会」として再発足した。

同年九月一日、機関紙『宮古教育』（月刊）が創刊された。創刊の辞は冒頭に「軍国主義の強制と封建的イデオロギーの桎梏から開放された」と記している。明治以来の「皇民教育」への反省とも受けとれよう。一九五〇年四月には専任の編集者において、『教育時報』（のち『宮古教育時報』）に改め、週刊に発展している。論壇も設けられ、PTAの必要性、教育委員会制度の確立、育英会の設立等も提唱されている。

一九五二年以降は月六回刊、隔日刊へと発展し、組織も一九五二年七月、「宮古教職員会」に改め、一九五三年十一月、連合体である沖縄教職員会の地域組織となつて、一九六〇年代の「日本国憲法の下へ」の壮大な祖国復帰運動の一翼を担っている。機関紙はそれら運動の反映であり、宮古圏域の教育問題はじめ、世相を知る貴重な資料である。（二〇一五・四・二八記）

14. 戦後初期新聞『みやこ新報』・『宮古民友新聞』の復刻

『ウルマ新報』（のち『うるま新報』）全六巻や『沖縄新民報・自由沖繩』全二巻、『戦後初期沖縄解放運動資料集』全三巻など、沖縄県関係新聞等の復刻、資料集等の出版に力を尽す不二出版（東京）が、今

度は一九四五〜五三年期の『占領期・琉球諸島新聞集成』全十六巻を三年計画で刊行を開始している。一〜三巻は宮古、四〜九巻は八重山、十〜十六巻は奄美で構成されており、監修には新崎盛暉沖縄大学名誉教授が当たっている。

周知のように、米軍は一九四五年三月〜六月の「沖縄戦」に引きつづいて沖縄本島並びに周辺離島の上陸当初から琉球諸島全域の占領統治を表明していた（「ミニッツ宣言」）。実際の軍政は宮古・八重山は同年十二月、奄美は翌四六年二月からの施行で、五二年四月「琉球政府」創立によつて全琉球の行政が一元化されるまで四圏域はそれぞれ独自の歩みをつづけている。監修に当たった新崎教授は、この時期の四群島は「社会的事情においてもかなりの地域差があり、政治的文化的諸活動においても独自の歩みをしてきた。こうした地域的独自性を知る貴重な手がかりが、それぞれの地域で発行されていた新聞であり、「琉球・沖縄史のみならず、日本現代史研究に対して寄与するところ少なくない」と記している。

二〇〇七年十一月、第一次刊行の一〜三巻は、第一巻が『宮古民友新聞』（一九四六・七〜五〇・二）、二〜三巻が『みやこ新報』（四五・一二〜五〇・六）の復刻である。「宮古民友」は一九二〇（大正九）年五月、宮古で初めて国政参加衆議院選挙が施行されたとき、立津春方候補側に『宮古新報』、盛島明長候補側に『宮古時報』が創刊され、互いに抗争したと伝えられている。選挙後の十一月、『宮古時報』は盛島候補側の瀬名波進が引きつぎ、『宮古民友新聞』と改題して創刊している。大正昭和戦前期をとおして宮古では十余種の新聞の興亡がみられるが、いずれも一〜二年、長くて数年で停・廃刊をくり返している。そのなかでひとり「宮古民友」のみが二十数年の長きにわたつて続刊していた。しかし太平洋戦争時の政府の「一県一紙」の言論統

制では、離島県に配慮して宮古は四紙を「宮古民友」一紙に統合したが、紙名は時節にそぐわないと『宮古朝日新聞』と改題している。一九四五年二月、戦火激しく印刷資材等の補給なくて停刊し、敗戦後の同年九月一日武装解除前の軍司令部内で、瀬名波進の二男・栄が編集発行人となって復刊している。

十一月中旬ごろ、ようやく焦土と化した平良の市街地に移って軍の管理下を離れ、翌四六年七月『宮古民友新聞』に復題している。「改題の辞」は、大正末期創刊以来二十数年、戦争という未曾有の変動期に、「幾度となく新聞本来の使命転換を余儀なくされ、時には新聞人としての良心に背く記事の取扱いを強いられることも一再ならず」と戦争責任等にふれるとともに、新時代の新聞として、「社会民衆の思想と生活が同一の線におかれねばならぬ」とし、「一部特権階級の御用紙」や「官僚の独善を排撃すると共に新聞それ自体の独善を排撃する」と、自戒をこめた再出発の立場を鮮明にしている。

『みやこ新報』は、敗戦後の十二月一日、未だ米軍政施行前に、純然たる民間紙としての創刊である。社主は元城辺町議の新城松雄、編集には山内朝保と平良好児の二人が参加している。山内執筆と伝えられる「創刊宣誓」は、「世界永遠の平和を建設し、徹底せる民主化を図る」立場から、焼跡で「茫然自失」することなく、「冷静沈着」、宮古の「現状を見詰め」、「食糧問題、住宅の建設、金融の問題、市区改正、衛生問題、風俗改善問題等に…挙げれば際限がない」重要課題の解決のための自覚をうながしている。創刊初日には警察署長ら七人の有識者で「宮古建設座談会」を催して、これらの課題解決に向けて縦横に語らせ、八回にわたって連載している。

戦前・戦中の軍国主義・超国家主義による言論統制から、敗戦で解放され、民主主義社会へと大きく転換したせいにか、両紙に引き続いて

次々と新聞が創刊されている。四六年には、『宮古タイムス』『労農新聞』『宮古公論』『宮古大衆新報』『宮古ガゼット』『先島時報』、四七年には、『宮古教育』（のち『教育時報』）、四八年、『公報新宮古』、四九年、『宮古婦人新聞』『時事読物』、五〇年には『宮古朝日新聞』『宮古経済時報』『日刊ニュース速報』『みやこ時報』等が確認されている。ほとんどA四〜B四判、隔日刊でいどの小新聞で、発行部数は五〇〇〜一〇〇〇部でいど。この時期、群島間の往来も規制され、未だラジオも入っておらず、新聞は唯一の情報源である。読みものに飢えていたせいもあるう、配達を待ち切れず新聞社まで取りにくる読者もいたと伝えられている。「解説」は第一巻冒頭に「戦後初期宮古の新聞」と題して仲宗根が担当した。

二〇〇八年四月と十月に刊行される四〜九巻の八重山編は『南西新報』と『海南時報』の二紙で、「解説」は大田静男氏、二〇〇九年四月と十月に刊行される十〜十六巻の奄美編は『奄美タイムス』で、「解説」は弓削政巳氏が担当している。なお〇八年二月には沖縄大学で、新崎教授を司会に、沖縄大学創立五〇周年記念プレシンポジウム「戦後初期の琉球諸島と琉球弧の可能性を探る」〈仮題〉が予定されている。

（「宮古郷土史研究会会報」一六四号、二〇〇八・一・一〇）

15. 黒柳保則「アメリカ軍政下の宮古群島における

『革新政党的軌跡』

愛知大学大学院文学研究科博士後期課程の黒柳保則氏はこのほど、論説「アメリカ軍政下の宮古群島における『革新』政党的軌跡」を同大学国際問題研究所『紀要』一一一号に発表している。一九四五（昭和二十）年十二月、米軍政開始から四八年三月、戦後初の市町村長、同議員選挙に至る間の、宮古民主党、宮古青年党、宮古社会党など三

政党を「戦前以来の政治的支配勢力」に対立する「革新」政党とみられて、その盛衰を検証した論文である。

黒柳氏は一九九八年三月と一九九九年三月に両三度にわたって来県、敗戦直後宮古で発行された『みやこ新報』『宮古タイムス』『宮古民友新聞』等の地元紙を渉猟するとともに、『平良市史』（平良市教育委員会）、『宮古行政史』（宮古支庁）、『振りかえる日々』（与那覇和彦）、『沖縄戦後史』（新崎盛暉）、『政治の舞台裏』（当山正喜）、『アメリカの沖縄統治関係法規総覧』（月刊沖繩社）、『沖縄戦後選挙史』（沖縄県町村会）等のほか、平良好児「戦後新聞の周辺く人間の息吹の所産として」、比嘉幹郎「政党の結成と性格」、天川晃「日本本土の占領と沖縄の占領」等の諸論文を読みくだし、駆使している。その上で、下地栄、瀨名波栄、真喜屋恵義、与那覇和彦氏ら、当時を知る人びとに面接しての成果である。

「はじめに」で、奄美・沖縄・宮古・八重山の四群島は、十五年戦争の末期から敗戦直後にかけて順次アメリカ軍政下におかれ、「各群島がそれぞれ一つの政治的小空間を形成し、独自の政治史を経験しているが、この時期の政治史的研究は沖縄群島に特定され、他の三群島は「等閑に附されている」との認識に立つての研究である。しかしこの時期の政党に関する史料は日米双方ともに絶対量は乏しく、限られた史料とインタビューによって「歴史像を構成する」ことを課題とした、とも記している。

こうして、一、軍政施行時の政治状況と宮古民主党の結成、二、宮古青年党・宮古社会党の結成と米国軍政府特別布告第二十三号「政党について」の公布、三、軍政下初の市町村長・市町村会議員選挙と「革新」政党、以上三つの柱立てで論じている。

宮古の終戦は地上戦のあった沖縄本島と異なって、八月十五日であ

り、米軍政の施行は三カ月余後の十二月八日である。米軍は宮古支庁はじめ五町村ともに従前どおり存続、新設の郡会議員も町村長推薦による任命のため、「戦前以来の政治的支配勢力によって独占された」、それゆえ、これら旧勢力は「政党の必要性をあまり感じていなかった」と捉えている。こうした「戦前以来の政治的支配勢力」と「対立する姿勢をとる人物を中心」に、宮古民主党は一九四六年五月、結成された。結成の契機は、同年三月二日の三千人を結集した時局批判演説会で、戦前以来の政治的支配勢力に対する批判や「民主化」「自治」要求の推進に積極的な役割を果たした、革新会（山内朝二ら）、青年連盟（池村恒正ら）、労農協議会（伊志嶺朝茂ら）など「革新団体」の活動の到達点である、との認識である。これらのメンバーは下地敏之を中心に民主党を結成したが、八名の執行委員のなかに「戦前以来の政治的支配勢力に属する人物」を抱えこんでいたために、のちに党内対立を生じた、とも記す。ともあれ、宮古民主党は「戦前以来の政治的支配勢力」に「明瞭に対立する」立場を堅持しつつもそのみに終始することなく、「戦時利得税・財産税の賦課や沖縄群島との行政統合」など、「群島レベルの問題」では「建設的な活動を展開していた」と評価している。

宮古青年党と、宮古社会党の結成の契機は、「独断専行の嫌いがあった」具志堅宗精宮古民政府知事に代表される「戦前以来の政治的支配勢力に対する不満」と、市町村長・同議員の「公選ムードが盛り上がったことがあいまって」と捉えている。青年党（盛島明秀ら）は「民政府の与儀達敏総務部長の『偏向人事』に反発する行動的なインテリ青年」らによって、一九四七年九月結成された。社会党は、戦前から「独特の無産党的な立場で『常に貧民の味方に立ってたたかってきた闘士』（与那覇和彦談）として民衆の厚い支持を受けていた前里秀栄」を中心

に同年十月結成された。

このように民主、青年、社会三党は「戦前以来の政治的支配勢力」を排除、批判する「革新」政党として、一九四八年三月の、戦後初の市町村長・同議員選挙に臨み、結果は「ともに新旧交替を強く印象付け」たとしている。

「おわりに」で、宮古の「革新」政党の立ち上がりが沖縄本島に比して一年以上も早かったのは、支庁、町村、町村議会等の行政機関は存続して、戦前からの「政治的支配勢力が温存され」、米軍によって「言論・結社の自由などが認められ、一定の民主化がなされた」ことで、早い時期から「支庁長や郡会議員、各町村長などの公選を求め」て、「民主化」や「自治」を要求する運動が起きたからだ、と指摘している。併せて本土の「民主化政策の進展に刺激」されて、「綱領」や「政策」は画期的だが、「思想よりも人間関係が重視された側面」があったことにも注意をうながしている。

結論として、これら宮古の「革新」政党は「軍政下という新時代に噴出した多様な民主化の動きをそれぞれ代表して活動を展開した、民主化運動の担い手と位置づけることができ」るが、「政治過程に対する影響力は、全般的にみて大きいとは言い難かった」と捉えている。この時期の宮古の政党史について、ここまで分析したのは本論考をもって嚆矢とされよう。

なお黒柳氏には、米軍政下南西諸島に係る先行論文に、「占領初期の奄美群島における政治と政党」（一九九七・九）、『沖縄政治史』から『琉球弧政治史』へく地域の捉え方、政治史研究のあり方をめぐって」（一九九九・三）などがある。

（「宮古郷土史研究会会報」一一七号、二〇〇〇・三・一七）

